

観天 望気

「守り」と「攻め」の農業

2024年、日本の平均気温は平年を1.48度も上回り、1898年に統計を開始してから最も高くなりました。2023年に続き、2年連続の記録更新です。今年は3月から最高気温30度以上の真夏日が観測され、夏も全国的に平年より気温が高い見込みです。

気候変動がもたらす気温や海面水温の上昇は、急な雷雨（いわゆるゲリラ豪雨）、大雨、大雪の増加や台風の発達にも影響します。今後、気象災害はさらに増加・激化することが予想されます。

加速度的に変化している状況に対し、経験に加え、データも生かして「守り」を固めることが必要です。農業に役立つ気象情報は、日々の天気予報、2週間気温予報、1か月・3か月予報といった季節予報、早期天候情報、台風情報、雷活動度、竜巻発生確度など、数多く発表されています。私は全国各地で気象情報の活用について講演していますが、情報をうまく使えば、気象災害から農作物を守るだけでなく、農業の効率化が可能という話をよくします。防除時期を適切に判断できたり、開花や収穫適期が平年と大幅にずれることを予測できたりし、計画的な作業に役立つのです。

「攻め」の農業にも着目。気温の上昇を追い風に再生二期作で生産量を増やす研究が進められています。高温耐性品種のおコメは私もおいしくいただいています。さらに、北海道で稲作が盛んになるなど、適地の変化を味方にした農業が増えています。ワイン用のブドウ栽培に適したエリア「ワインベルト」は、北緯・南緯30〜50度。しかし近年、より高緯度が注目されています。代表例が英国で、国産スパークリングワインの販売量が23年までの5年間で約2.8倍になったといわれています。今後は北欧でも増加しそうです。

農業は先人から受け継いだ知恵と最新技術を組み合わせ、「守り」と「攻め」の二刀流で気候変動に立ち向かっています。その取り組みは私たちの食卓を支え、地域の環境を守り、次世代に豊かな食と農の文化をつなぐ希望の光です。



久保井 朝美

気象予報士

くぼい あさみ

農業を経験して気象に関心を深め、気象予報士資格を取得。現在はNHK総合の報道番組などに気象キャスターとして出演する他、全国で講演活動をおこなう。趣味はお城めぐりで、著書に「城好き気象予報士とめぐる名城37 天気が変えた戦国・近世の城」(PHP研究所)がある。